

『大日本史』の史観と「水戸学」の再構築

徐 興慶

(商兆琦 翻訳)

序

一般的に、朱舜水を招聘して日本の「実学」を大に推進する徳川光圀（1628-1701、以下光圀と略称）によって開始された『大日本史』の編纂は、基本的に朱子学的な道德論に基づき、「日本史観」を構築しようとしたものだと考えられる。光圀が亡くなった後も、水戸藩は、倫理道德及び尊皇といった立場に立って、「大日本史」の編纂を続けてきた。その間、水戸の彰考館は、『皇朝新史』という書名を推したが、正徳五年（1715）、第三代藩主の徳川綱條（1656-1718）の裁定により、書名が『大日本史』と定められて出版された（正徳本）。正徳本が刊行された後も、編纂事業は続けられていた。朱舜水の弟子である安積覚（澹泊、1656-1738）は、享保年間に、『大日本史』・享保本の編纂を完成した。しかし、「本紀」、「列伝」が脱稿したが、「志」「表」の部分は未着手のままであった。澹泊が死んだ後、編纂事業は停滞してしまった。天明六年（1786）、彰考館総裁の立原翠軒（1744-1823）により、1799年の光圀百年忌に備えた刊行のため、「本紀」、「列伝」の校訂作業が進められた。その時、水戸藩出身の長久保赤水、藤田幽谷、高橋坦室などの彰考館館員は、『大日本史』編纂に加わった。

日本学界の論じた「水戸学」（水府学とも呼ばれる）は、一般に天保期以降、水戸藩に形成された学問を指す。儒学、神

道、国学などの内容を含め、一般的に「後期水戸学」と呼ばれる。その思想の形成は、外圧に押されている幕末の危機意識と緊密に繋がっている。

立原翠軒が天明七年（1787）年六月に「天下の三大患」について老中の松平定信に上書した。君臣上下の名分を正し、社会秩序を安定させるために、藤田幽谷（1774-1826）は尊皇理論を基礎にして「正名論」（1791）を著わし、また1797年、『大日本史』の書名を『史稿』に改名すべきだと主張した。幽谷の息子である藤田東湖（1806-1855）は、天保八年（1837）に刊行された「弘道館記」では、「我東照宮、撥乱反正、尊王攘夷、允武允文、以開太平之基。吾祖威公（頼房引用者）、實受封於東土、夙慕日本武尊之為人、尊神道、繕武備。義公（光圀引用者）繼述、嘗發感於夷齊、更崇儒教、明倫正名、以藩屏國家。爾來百数十年、世承遺緒、沐浴恩澤、以至今日、則苟為臣子者、豈可弗思所以推弘斯道、發揚先德乎。此則館之所以為設也」¹と論じている。このように、「後期水戸学」が、儒学の名分論を踏まえ、頼房の神道尊敬の態度、及び光圀の尊王（皇）の姿勢を受け継いだことを知ることは難しくない。しかし、『大日本史』の史観には、「敬幕」と矛盾するところが多くある。本論は、主として『大日本史』編纂の歴史背景、その史観の形成、水戸学と古学との関係、前・後期水戸学の一致性と相違性、徂徠学と水戸学との相互関係、及び「中期水戸学」の存否問題などについて考察を行い、近代日本にとっての水戸学の意義を明らかにしようとする。

一、『大日本史』編纂の歴史背景

『大日本史』の編纂は、明暦三年（1657）年に開始され、明治三十九年（1906）にようやく完成された。合計、397巻である。開始から完成まで、約二百五十年をかけて完成した。莫大な資源が投入されてきた『大日本史』には、多くの史料や深い学識がある。『大日本史』の編纂は、光圀に大きな名声をもたらした同時に、水戸藩の武士たちが、世代を超えて日本人

の国家意識、天皇を核心とする忠誠心及び政体制度を育成するための基礎を造った。後世の歴史研究者は、「水戸学」を、光圀とその後継者たちの歴史編纂事業というよりも、むしろ明治維新の前兆を示す新しい思想として捉えていた。徳川幕府体制の崩壊の過程において、「水戸学」は一定な役割を果たしたのは、誰でも認められた事実である。しかし、「水戸学」の役割をどのように評価すべきかについて、複数の意見がある。

日本学界は、よく「水戸学」を「前期水戸学」と「後期水戸学」に分けて捉える。「前期水戸学」の『大日本史』の編纂は、儒学の歴史観に基づき、理論上では、道徳的な評判を重んじる。考証上では、光圀の主導した全国的な史料調査、史料の厳密な解説が行われた。この水戸藩の実証的な伝統は、明治初期までに続けられてきた。吉田俊純によれば、「前期水戸学」は、尊王論を中核としていても、敬慕の内容を持つている。「大日本史」はなぜ武家政権が成立したかを、儒教理論によって解明した書なのである。『大日本史』は、平安中期以降の天皇を政治的君主としてよりも、政権を安定させるための宗教的権威、祭祀王としてとらえている。^②『大日本史』における光圀の歴史観は、次の三点に集約的に体现される。(1)神功皇后を皇后伝に列する。^③(2)大友皇子を帝紀に列する。^④(3)南朝正統論を唱える。『本朝通鑑』は、北朝正統論を唱えるが、光圀は、天皇権威を象徴する三種の神器（鏡・玉・剣）の所在を「正統性」の根拠とし、南朝正統論を唱えた（南北朝対立の時、三種の神器は南朝にある）。皇位の象徴である三種の神器が北朝の後小松天皇（1377-1433）に移譲されたと共に、その「正統性」も北朝に移った。それゆえ、『大日本史』は、南北朝合一の歴史を記したあと、北朝の後小松天皇の伝を立てた。安積覚などの彰考館の館員たちは、これに対する反対の意見を持っていた。しかし、光圀は、「天下後世雖有罪罪我者、但大義存焉、吾豈能曲筆」という態度を表明した。ここで問題となるのは、光圀は、儒学の立場から天皇を政治的君主と捉えて「南朝正統論」を唱えていた一方、「北朝正統論」を支持した。この特徴は、『大日本史』が南北朝の統一（1392年）をもって、締めくくられているということから見られる。隠岐を脱して北条政権を滅亡させた後醍醐天皇（1288-1339）は、皇権の回復を図った。後醍醐天皇が打ち出した「建武の新政」という理想は、外見的には復古調の色合いがある

が、実は、中国皇帝専制の発想に近い。これこそが、光圀は南朝の正統性を唱える理由である。もし、儒学の正統論から見れば、道徳、血統の正統性を判断するほかに、「長幼の序」を考慮しなければならない。北朝持明院統の後深草天皇（1233-1304）⁵が兄で、南朝大覚寺統の後龜山天皇（1249-1305）⁶が弟である。それゆえ、儒学の理論に従えば、「南朝正統論」が成り立てない。光圀は、南朝正統論を唱えたのは、むしろ君主への忠誠という武士思想を実践するためであり、また、儒学の理論を通して日本の歴史と文化を検討するためである。「後期水戸学」は、光圀の抱いたこの「和漢折衷」の矛盾を継承したように見える。

（一）『大日本史』における国体観

日本の国体観の核心をなすのが「忠臣孝子」の道徳だと言えば、それは少なくとも元禄十五年末（1703）の赤穂事件に遡ることができる。しかし、光圀によれば、『太平記』に記録された楠木正成（1294-1336）・正行（1326-1399）親子の「桜井の別れ」は、最も水戸藩の唱える国体の核心思想を体現できる。言い換えれば、光圀が『大日本史』を編纂する目的は、「皇統を正閏し、人臣を是非」するのである。つまり、光圀は、名分秩序を正すために、「大義」という理念を『大日本史』編纂の基準とした。南北朝正閏問題は、実は、明治四十四年（1911）の第二十七回国会で大きな論争を引き起こし、さらに学术界の議論にまで発展した。「北朝正統論」に賛成すれば、万世一系の立場によって国体を擁護できるが、楠木親子の南朝に対する忠誠をどのように位置づけるかが争点となった。なぜならば、道徳教育のために、忠誠的な国民道徳感の育成は不可欠からである。光圀は、楠木正成の忠誠精神を称賛して湊川で墓碑を建立した。墓碑の裏面には、朱舜水の作った「楠公碑陰記」という賛文を刻まれている。この賛文は、楠木正成の「忠誠」を高く評価しながら、光圀の「義」をも反映した。その後、多くの日本人の賛同を得た。⁷

水戸藩第三代藩主の徳川綱條が、『大日本史』の序文で、「百王一系、天地無窮」という主旨を明記した。それは、明らか

に光圀の国体思想を継承したものである。彰考館総裁の青山延子（1776-1833）が編修した『武公遺事』には、「將軍家理のある事なりとも、天子を敵と遊され候ては不義の事なれば、は將軍家に従ふことはあるまじ……」とある。ここで反映された天皇に忠誠を尽す精神は、水戸藩の「家法」である。清原貞雄によれば、幕末・維新时期に際して、日本を危機から救うのは、まさにこの水戸藩の「家法」であった。⁸⁾

光圀の国体精神は、後期水戸学においてその頂点に達した。幕末の多くの志士は、「国体」を擁護して、結果として明治維新の発生を促した。彼らの論じた国体精神は、一言でいうと、「尊王攘夷」の思想である。「国体」の本義は、天皇の親政を是とし、武家政治を否定するのである。しかし、実際の状況は、天皇より、幕府の権力は明らかに上回っている。幕末、朝廷（公）の權威と幕府の権力を結びつけて調和させる公武合体のような運動があった。⁹⁾ 嘉永六年（1853）、ペリー艦隊来航の後、幕府の実力が衰え、結局、開国せざるを得なかった。日本の未来を憂える幕末の志士たちは、国体の基本が天皇親政の復活にあると考え、天皇親政を復活するために、まず「公武合体」の体制を廃止して尊王思想の基礎を確立しようとした。水戸学派は、国体観念に基づいて形成された尊王攘夷の思想流派である。代表的な学者は、藤田幽谷（1774-1826）、会沢正志斎（1782-1863）、¹⁰⁾ 藤田東湖（1806-1855）¹¹⁾ である。藤田幽谷は、修史の伝統を重んじ、「国体論」、「万世一系の皇統」の特殊性を解釈するとき、君臣の「名分」論を打ち出した。会沢正志斎は、「忠孝」の理念を主張した。藤田東湖は、「仁厚義勇之風」を提出して国体論の再建を試みた。水戸藩は、御三家のひとつとして、他藩と比べ、日本のナショナルリズムの源流と先駆者の姿勢を示していた。水戸藩の国体論には、そもそも幕府反対の要素が含まれていなかった。しかし、忠誠をつくすべき対象は、天皇であるため、幕府との間、ある程度の緊張感を保っていた。それは、長い間、学界の注目するところである。

(二) 『大日本史』における南北朝正閏論

一般的に言えば、徳川時代の征夷大將軍が、北朝系統の朝廷によって任命されたものである。もし北朝系統の朝廷が正統でなければ、徳川時代の征夷大將軍もその合法を失ってしまう。それゆえ、徳川時代においては、室町時代から北朝（持明院統）までの天皇系統が正統とされる。それも、江戸時代の歴史学者の林羅山、新井白石などの論点である。前述したように、『大日本史』は、儒学の正統論によって「北朝正統論」を構築したが、それと同時に、個人道徳（光圀の信条）での君主への忠誠を説明し、「南朝正統論」をも強調した。『大日本史』の編纂が南朝の年号を用いた。この「南朝正統論」の史観は、『太平記』及び朱子学歴史観からの影響を受けたように見える。具体的に言えば、光圀は、鎌倉時代後期から南北朝時代の公卿の合法性を認める。源親房（北畠親房、1293-1354）は、後醍醐天皇の時代で活躍した公卿の一人であった。彼は、国体を重んじて皇国史観を主張し、『神皇正統記』を著わした。しかし、親房は、曾て公卿階層の立場に立って、天皇の専制政治（建武の新政）を批判し、また政治路線においては、後醍醐天皇との対立があった。足利氏の内紛に際して、親房は、足利尊氏（1305-1388）が南朝への一時降伏を認めた。それは、いわゆる正平一統（1351）であった。それによって、北朝が南朝に統一された。しかし、1392年、足利義満（1358-1408）は改めて南朝を北朝に統一させた。当時、北畠家は、南朝公卿として室町幕府の守護大名を務め続け、また戦国大名に転化した。親房は、南朝と北朝の両方とも関係を持っていた。しかし、水戸学及びその後の皇国史観は、親房を「建武の中興、後醍醐天皇の再即位を協力した忠臣」と位置づけた。光圀は、「日本古来、万世一系」、「大覚寺統（南朝）こそが正統だ」という親房の考えを信じていた。『大日本史』は、親房の路線に従ったが、水戸の学者たちは、実は、親房の思想を曲解し、神武創業から南北朝合一（南朝滅亡）までの百代帝王治世の歴史を描き出した。さらに、足利尊氏を逆賊扱いし、親房と楠木正成を忠臣とした。王家驛によれば、有徳者の継承を正統とする『神皇正統記』の観点は、中国の儒学の思想からの影響を受けている。親房が『神皇正統記』を著して南朝正統説を主張したとき、南・北朝はまた両立していた。しかし、南北朝の合一の後、北朝の天皇は、正統な皇位継承者と

なるので、当時から、北朝正統論を主張していた人が既にいた。

二、水戸学と古学との関係

(一) 山鹿素行と朱舜水

山鹿素行（1622-1685）は、徳川初期の儒学者、兵学者であつて、山鹿流及び古学派の祖とも言われる。彼は、初めは幕府林家の朱子学を学んだ。しかし、三十九歳になつても、なお宋儒の言う「心性の学」を理解できず、朱子学が実は聖人の道を離れた異端の学だと考えるようになった。終に、寛文六年（1666）、四十五歳の時、『聖教要録』を刊行して朱子学を批判した。当時、朱舜水は江戸に招かれて講学していた。素行は、直接に朱舜水の教えを受けたことがあり、「素行」とは、実は朱舜水から授かる字である。素行のために、朱舜水は次のような「子敬箴」を作った。

問學如何？ 徵乎素行。素行如何？ 希賢希聖、匪敢潜論、勉承來命。堯舜可為、人皆此性、儒道非難、養至德聖。懿美
内涵、聞望外令、文武張弛、維人無競。温恭誠允、端莊靜正、不在他求、是在子敬。¹³

素行に対して、儒道を発揚するとは、「養いて徳聖に至る」のだと、朱舜水は言った。

(二) 山鹿素行と徳川光圀

光圀が、素行の贈った『聖教要録』を読んだ後、周公、孔子の原典に遡って検討する素行の手法は、朱子学の思想体系を構築する幕府の目標と食い違ふと考え、その朱子学批判の部分削除すべきだと提言した。しかし、素行は、この提言を受け入れなかつた。¹⁴素行と光圀は、互いに尊敬し合っていたが、それぞれ自分の学問立場を妥協せず、しっかりと守っていた。光圀は、素行が自分の事業に役立てる人材だと分かっていたながら、水戸藩が必ず朱子学の学問を守り、朱子学への批判

を許さないもので、やむを得ず素行を江戸の水戸藩屋敷から追い払った。朱舜水からみれば、これは極めて残念なことであった。

『聖教要録』の序文では、素行が次のように論じている。「漢唐之訓誥、宋明之理學、各利口饒舌、而欲弁惑、惑愈深、令聖人坐於塗炭、最可畏也。(中略)予者師周公孔子、不師漢唐宋明之諸儒。學志聖教、而不志異端。行專日用、不事洒落、知之至也。」¹⁵ また、「及周衰、天生仲尼、自生民以來、未有盛於孔子也。孔子没而聖人之統殆盡」と言う。¹⁶ 素行が漢唐宋明の學問を是とせず、周公、孔子の道を尊ぶ姿勢が窺わせる。そして、「行專日用、不事洒落」という學問の態度は、朱舜水の追求する「日用の學」と一致している。詩については、素行の「後之學作詩、巧言奇趣、其所言皆虛誕也。故詩人者天下之閑人也、佚樂遊宴之媒也」との主張も朱舜水の詩に対する批判と類似している。¹⁷

素行は、さらに「及宋、周程張邵相繼而起、聖人之學至此大變、學者陽儒陰異端也。道統之傳至宋竟泯沒、況陸王之徒不足算、唯朱元晦大功聖經、然不得超出餘流。噫！道之託人行世皆在天、其孰強與於此乎」¹⁸と論じている。素行によれば、徳川社会が聖教を恢復するために、まず「陽儒陰異端」の學問を排除すべきである。しかし、この論点は、当時宋学を眞理とする幕府林家によって敵視された。素行の弟子たちは、林家からの攻撃を恐れずに立ち向かって、次のように素行を賛美した。「先生勃興二千載之後、垂跡於本朝、崇周公孔子之道、初舉聖學之綱領、身也、家也、國也、天下也。於文於武、其教學聞而無不通、為而無不効、先生之在於今世、殆時政之化乎」¹⁹。自分の學問の受けた批判については、素行も自ら次のように反発した。「罪我者、罪周公孔子之道也。我可罪而道不可罪、罪聖人之道者、時世之誤也」(『配所殘筆』)。このように、素行は、これから徳川社会の學問發展が、もし周公、孔子の本当の聖賢の道を排斥すれば、時代に逆行してしまうようになると論じていた。さらに、「聖學何為乎？學為人之道也。聖教何為乎？教為人之道也。人不學則不知道、生質之美、知識之敏、不知道其蔽多」といい、「學唯學古訓、致其知而施日用也」(『聖教要録』上「聖學」)と述べている。つまり、聖人の教えを頻繁に、巧みに語る必要がなく、百姓の民生、日常生活に即して簡単に説けば結構である。素行は、「弄精神、認心

性、乃道遙遠」(『聖教要録』下「道原篇」という宋儒の作法を批判していた。素行の提唱した日用の学は、即ち朱舜水が日本で唱導した実学の思想であった。素行は、実学の思想を義利の弁までに発展させ、道徳と経済との関係を論じた。「君子以義為利、小人知利不知義。君子之利能亨、小人之利不全。義利不支離、利者義之和也。義之所有、利随之」(『聖教要録』上「知至」と論じ、義利の道徳が経済の基礎を為し、義と利が互いに矛盾しないことを説明する。

山鹿素行が朱舜水に対して弟子の礼をとり、その思想形成も朱舜水からの影響を大に受けていた。他方、荻生徂徠も多少山鹿素行からの影響を受けたに違いない。⁽²⁰⁾ 言い換えれば、朱舜水の思想が直接的にも間接的にも日本古学派の儒学者に影響を与えたと考えられる。朱舜水と日本古学派との関係については、多くの先行研究が存在するので、贅言するまでもない。⁽²¹⁾

三、水戸藩における徂徠学の萌芽

学界は、水戸学を朱子学発展の様態として捉えがちである。また、朱舜水の学問と思想を朱子学と同一視し、あるいは陽明学と類似すると見る傾向がある。しかし、朱舜水は自ら、「宋儒之學可為也、宋儒之氣息不可師也。至若陽明之事、偶舉其說『良知是赤的』、以為笑談耳。故曰『良知豈是赤來的』、非僕宗陽明學、信勿深疑」⁽²²⁾と自己釈明をした。朱舜水の弟子の安積覚は、徂徠に宛てた書簡では、「礼」の問題を次のように論じた。「先侯(光圀引用者)嘗問朱文恭(朱舜水引用者)以五廟之制、文恭不採『家禮』、其言曰『家禮』乃庶士官司之礼、豈所以施於諸侯者哉?庶士官司之礼、尚不得施之士、況得施之以大夫、施之諸侯乎?」⁽²³⁾「五廟の制」について、朱舜水は「朱子謂凡廟之制、前廟以奉神、後寢以藏衣冠、但失之粗率、亦非鑿鑿謂前廟奉主也」⁽²⁴⁾と論じ、朱熹の考えと明らかに異なっている。そして、太夫人の配祀問題については、朱舜水は、「程子以翁婦為嫌、欲為別廟別祭、於禮固為支離」と論じる。それゆえ、安積は、「文恭不專尚程朱、往往此類是也」⁽²⁵⁾と言った。以上のことから、日本に滞在していたとき、朱舜水は程朱学、陽明学にとらわれずに、その思想主張が徳川

幕府の儒官である木下順庵(1691-1699)⁽²⁶⁾、山鹿素行、荻生徂徠の唱えていた古学派と密接している。朱舜水是、性理学の空理空論を避けて政治、経済の実情と関連する実学主義を主張していた。

(一) 政治学としての徂徠学

荻生徂徠(1666-1728)の学問が重視されてから、日本学界における清朝に対する評価も、そして明末儒学、清初儒学に対する評価も、大きく変わった。このような評価も、知識人階層に深く浸透していた。徂徠の認めた「聖人の道」とは、伏羲、神農、黄帝、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、孔子という詩、書、礼、楽を伝授する聖人たちが作った、天下を安んずるための道、及び伝授した詩、書、礼、楽である。これは、上述した素行の学問の姿勢とほぼ一致している。徂徠は「弁道」に、「礼楽刑政」を「仁愛」の本体とし、先王の道が「仁」を至大とした。さらに「弁名」(上)には、「仁」を次のように定義した。「仁者、謂長人安民之徳也、是聖人之大徳也。天地大徳曰生、聖人則之、故又謂之好生之徳」。徂徠の「天下を安んずる道」は、最大な道德としての「仁」に基づき、民を安んずることを目標とする。民を安んずるために、国家の経済を発展させる必要がある。言い換えれば、徂徠は、歴史に注目し、政治学としての徂徠学は、古文辞学を方法として諸子百家を研究し、礼楽刑政制度などの聖人の道を政治、経済と関連させて活用していた。この方法は、素行の道德と経済の相互関係論から影響を受け、「道」を己の物として、みずから聖人になっていく朱子学の思考様式と異なっている。⁽²⁷⁾

(二) 水戸学に対する徂徠学の影響

(1) 一元から多元への学問発展

徂徠学が後期水戸学及び『大日本史』の編纂に対して影響を及ぼしたかどうかをめぐって、ずっと前から論争があった。

徂徠の学問は、前期水戸学と正反対の性格を持ったが、本当に後期水戸学に影響を与えたのか。もし影響があれば、その影

響はどんなものだったのか？これらの問題を、まず解決すべきである。徳川社会は、17世紀から朱子学を中心学問として、また朱舜水の求める民生日用の実学を取り入れ、徳川の官学の合法性に衝撃を与えた。18世紀から、伊藤仁斎の唱えた古義学、荻生徂徠の唱えた古文辞学が次々現れてきた。素行、仁斎、徂徠の三人は、いずれも宋儒の論説を排斥して、原始の儒学思想を復活しようとした。また、日本意識に基づいて日本に伝えられた儒学によって、孔子の聖教精神を發揚しようとした。素行と徂徠は、さらに団体道徳的な倫理と功利学説を提唱し、兵学研究を進め、国家主義を力説した。彼らは、学問が道徳を基礎にして政治と経済の發展を重んじるべきだと考えている。それは、「先生（朱舜水引用者）の学問は、本当の経済学問である。（中略）先生は、詩書礼樂から、稲田耕作、屋敷様式、酒食塩醬までは熟知している。」⁽²⁸⁾という朱舜水の実学の特質に対する光圀の評価と類似している。当時は、中江藤樹（1608-1648）をはじめとする陽明学、国学を大成した本居宣長（1730-1801）などの学問も存在する。それは、徳川社会の朱子学の一元的な学問状態から多元的な方向の發展を示した。

徂徠は朱舜水の弟子の安積覚と付き合った前に、間接的に朱舜水の学問に接したことがある。朱舜水の影響を吸収することによって、「六経」を核心とする思想を完成した。徂徠の方法は、実は「書理只在文本、涵泳深思自然會有、注脚離他不得」⁽²⁹⁾という朱舜水の考えと近い。最近は、朱舜水と荻生徂徠との関連を改めて検討する高悦の研究は、注目に値する。⁽³⁰⁾その他、日本兵学について、徂徠は、前述した楠木正成を我が国中古兵学の第一人者だと高く評価した。そして、光圀をも高く評価した。⁽³¹⁾安積覚に宛てた書簡には、徂徠は、次のように述べている。

西山先侯（光圀引用者）首革儒者陋習、且曰有民人焉、有社稷焉、寡人亦儒者也、是自非常之君所見、迥踰流俗萬萬、因又憾時相及而遇不及、恍如異代、徒為之悵望已。（『徂徠集』卷28）

徂徠は光圀が儒学の陋習を改め、人民、国家に配慮することを高く評価した。光圀と会えなかったことを遺憾に思っている。また、次のように述べる。

不佞茂卿、自少小仄聞大邦之風、私心嚮往者尚矣。恭惟西山先侯、以親藩之尊、為柱石斯文、天縱之資、追蹤異代、乃間平不啻已。其好士下賢之盛、焜燁一世、則先明遺民、有若朱舜水先生、暨僧東皐（心越引用者）之屬、遙覽德輝、翩然來集、自余文學之士、從遊如雲、亦皆梁苑之選也。（『徂徠集』卷28）

ここから見れば、徂徠は光圀が人材を重んじて、朱舜水を招聘して作らせた水戸藩の独特な学風に憧れることが分かる。

(2) 徂徠学が水戸学に及ぼす影響の有無について

早く徂徠学と水戸学との関係性に注目した尾藤正英が『水戸市史』（中巻の二）に収録された史料を使って、二者の関連性を確認した。

この前期から後期への思想上の変化は、水戸藩の内部だけで生じた現象ではなく、その背景に江戸時代中期における思想界の動向の推移があった。前期における編纂事業（『大日本史』引用者）が朱子学に立脚していたのは、朱子学が当時の儒学の世界で主流を占めていたことの反映であった。やがて元禄時代の前後から、伊藤仁斎・荻生徂徠らによって、朱子学に対する批判が唱えられ、これに代る古学の学説が提示されるに及んで、学界の状況が一変した。とくに徂徠の学問は、十八世紀中葉の江戸を中心とする学界を風靡したが、さらにその影響下に賀茂真淵・本居宣長らによる国学の研究が発展し、朱子学ばかりではなく、儒学そのものの思想的権威も前期に比べれば失われてきた。後期における修史事業の進展と、これを基礎としての水戸学の成立とは、右の徂徠学ならびに国学の影響を無視しては考えることができない。⁽³²⁾

歴史編纂の態度からみれば、後期水戸学は徂徠学より影響を受けたという尾藤正英の論述に、小島康敬も賛同している。言ってみれば、徂徠出現以後の知的世界は、徂徠の思想を忠実に継承するにしろ、批判的に摂取するにしろ、あるいは正面からこれを否定し去るにしろ、徂徠の学問、思想と何らかの形にかかわった所で展開されていったと言ってよいので

あろう。³³しかし、これに対して、名越時正が異論を唱えていた。「氏（尾藤引用者）の後期水戸学国体論が、徂徠↓制度史↓志表といふ経路を経て成立したとする立論にある。それは前期水戸学の国体論を無視して、或いは知らないで進められたとしか考へられない。」また、前期水戸学の「国体論」は、主に栗山潜峰によって唱えられていた。後期水戸学の「国体論」は、その継承として捉えられると指摘した。³⁴徳川時代において、国体思想が既に発達したのは、事実であるが、ここで、筆者が論じたい「前期水戸学国体論」とは、基本的に光圀の国史研究及び朱子学の大義名分思想に由来したものである。その尊王思想及び『大日本史』史観は、彰考館の学者たちに影響を与えた。

荒川久壽男は、革命史観に基づき、徂徠学からの影響を否定した。³⁵荒川によれば、後期水戸学は、実は、徂徠学を超えて「道義」を軸にして経世実用を唱える学問である。³⁶その他に、橋川文三は、「徂徠学派の影響が具体的にどのようなものであったかは従来あまり研究された様子もなく、それが『大日本史』編修にどんな作用を与えたかも判然としないうところがある。（中略）さらに、のちには翠軒と敵対関係になった幽谷もまた、古文辞学そのものには概して好意的とみられることなどを考慮すれば、徂徠学が水戸史学に与えた影響一般ということはなおさらに捉えにくいことになる。」³⁷と論じていた。ここからみれば、橋川は、この問題について、結論を下さなかった。藤田幽谷と翠軒との敵対関係については、後述する。

梶山孝夫も尾藤正英の論点を批判した。「水戸藩においても安積澹泊が徂徠と文通したことは著名であり、また長久保赤水、田中江南らによって徂徠学の導入が図られ、谷田部東壑や立原翠軒も徂徠学を学んだといふ。しかし翠軒が特定の学派に捉はれなかったのも事実であり、志表の編纂からいへば廃止を主張したほどであるから、この方面から徂徠学の影響を直接に受けたとはいへまい。より性格にいへば拒否の立場とみるべきであらう」³⁸。そのほか、高山大毅は、翠軒と幽谷が徂徠学との関係を触れなかったが、「翠軒は諸学兼採を説き、徂徠学に専ら依拠したわけではない。しかし、彼の力によって、水戸徳川家中の講学において徂徠学が排除されなくなったのは、大きな変化であった。」³⁹と論じている。翠軒の弟子である小宮山楓軒も徂徠学に心を傾け、大阪に行つて徂徠学の文献を筆録したことがある。『余毒』という文章では、次のように

論じている。

本藩（水戸引用者）之學、皆主宋學、文辭朴質、頗有固陋之弊。至是江南首倡古學、府下之士、始聞新奇之說、以爲痛快、從遊者甚衆。水府之學於是乎一變。厥後古學大行、雖一洗當時固陋之弊、而明儒偷薄之風、入人肌骨、至今不可去者、亦江南之余毒也。⁽⁴⁰⁾

小宮山がここで言及した江南とは、即ち翠軒の先生の田中江南である。その思想が徂徠学に強く影響された。水戸学が宋学を主とするので、江南から翠軒までの徂徠学の脈絡が、小宮山によって「余毒」と見なされた。しかし、中後期の水戸学者、例えば、長久保赤水（1717-1801）、⁽⁴¹⁾ 谷田部東壑（1733-1789）、⁽⁴²⁾ 立原翠軒などが宝暦年間（1751-1763）の間、続々と徂徠学を導き入れた。特に立原翠軒⁽⁴³⁾は、水戸学の再興にあたって、大きな貢献をなした。

四、立原翠軒と「中期水戸学」の再興

(一) 立原翠軒の学問形成

水戸彰考館の事業は、朱舜水の弟子の安積寛が死んだ後、一度停滞していた。骨董品が日ごとに破損していた。書籍と資料の管理も混乱していた。目録類の書籍には、大きなシミの被害があった。立原翠軒が古器物などの修膳に力を尽してから、彰考館の館蔵状況は好転してきた。立原翠軒の号は、東里・此君堂である。少年時代は、谷田部東壑及び徂徠学派の田中江南について学んだ。そして、大内熊耳に文章を学び、細井平洲に唐音学を学び、松平楽山に書法を学んだ。その勉学の主要な目的は、徂徠の学問の方法を理解しようとしたのである。宝暦十三年（1763）、翠軒が二十歳で彰考館に入り、明和三年（1766）に彰考館編集になった。しかし、二十年間をかけて『大日本史』を編纂し、「仏寺志」を著しても、当時の総裁に重用されていなかった。その一番の問題は、学派の問題である。当時、彰考館館員の多くは、朱子学者であった。しか

し、徂徠学者の田中江南は、宋学の常套から離れて水戸で講学し、翠軒などの若手学者の好評を得た。翠軒も広くさまざまの書物を読み、特に仁斎、徂徠の著作を好んでいた。それゆえ、翠軒が当時の総裁である名越南溪、富田長洲に排斥されていた⁽⁴⁴⁾。光圀の遺志を継いで、翠軒は、『大日本史』の編纂の早期完成を目指した。志を編纂するに当って、朱子学の道徳性を尊重し、幅広く資料を収集し、『論語』、『孟子』を精読し、それによって歴史の史料を編纂する。翠軒は、詞賦文章を重んじ、金石学を嗜み、儒学の傾向を持ちながら、現状承認主義に傾け、積極的に徂徠学の学問方法を考えていた。学問研究は流派にとらわれずに、知識を広く吸収すべきと思ひ、翠軒は、「六経諸史皆吾師」という勉学の態度を持っていた。経書を解釈するには、漢の伝、唐の疏、宋の注、何れも参考できると考え、折衷の態度を強調した。翠軒の傾心した方法は、六経などの古典を尊重する徂徠学の方法である。翠軒は、「修身齐家」のために勉学を務めたが、程朱の学問を誇ったことがなかったと自称した。しかし、当時水戸藩の学者の多くは、朱子学関係の書籍しか読まないし、道徳的な学問しか論じなかった。それゆえ、翠軒の学問は、程朱を誇って道徳を廃棄させて学問の伝統を裏切った異端の学問と見なされていた。

翠軒が彰考館編集を務めたとき、詩文、書画、音楽、古文書、系譜などの学問を広く渉猟していた。人材を育成するため、弟子を集めて私塾を開き、また他藩の優れる人材を録用した。藩内では、翠軒の人材採用の態度に対する反発があった。そして、翠軒が、多元的な学問態度によって『大日本史』の「志」を編纂した。それは、「道徳」を中心とする前期水戸学のやり方と異なっていた。翠軒は五十年間彰考館の仕事を積極的に務めた。蔵書を整理し、目録（翠軒録）を作り、修訂と補足を行い、さらに文庫の書架を作り、本箱を修理し、書類を分類した。その他、『西山遺聞』⁽⁴⁵⁾、『此君堂文集』⁽⁴⁶⁾、『此君堂詩集』（二巻）、同『補遺』（一巻）、『往復書案』⁽⁴⁷⁾、『垂統大記』⁽⁴⁸⁾、『白石遺文』（二冊）などの著作、文集を残した。また、安積覚と新井白石との往来書簡集を整理し、『新安書簡』（三冊）を刊行した。『国書総目録』には、58種類の翠軒の文献が収録されている⁽⁴⁹⁾。

寛政八年（1796）、五十二歳の翠軒は、第六代藩主徳川治保（文公、1751-1805）に高く評価され、彰考館総裁に任命さ

れた。それと同時に、藩主の侍読と藩政諮詢を務めるようになった。当時、彰考館には蔵書不足の問題があることに鑑みて、自分の蔵書の「此君堂蔵本」を史館に寄贈した。この「献納書目」は、『彰考館文庫目録』(1919)に収録されている。しかし、彰考館は、第二次世界大戦で大破してしまった。それゆえ、翠軒の蔵書を識別できるのは少ない。幸いに、国会図書館に保存される『見聞書目』によれば、翠軒蔵書の一斑をうかがい知ることができる。また、同志社大学の「小室・沢辺記念文庫」には翠軒の自筆草稿、写本、蔵書七十点ほどが保存されている。そのほかに、翠軒の弟子の小宮山楓軒も「此君堂蔵本」に基づいて「閲書目録」(十冊)を整理した。「閲書目録」は、文化五年(1809)から天保十年(1838)まで翠軒の蔵書の貸し出し記録を詳しく記録した。今は、国会図書館に保存される「小宮山叢書」及び「静嘉堂文庫」に保存される「小宮山楓軒叢書」が、揃って六百余冊がある。

多元的な学問を探求する学者として、翠軒は、名分論から「日本尊厳性」の自覚まで独特な考えを持ち、文公に朱舜水の模造する水戸「大成殿」の修復を建言した。天明六年(1786)の火災の後、幕府は水戸「大成殿」を模倣して、聖堂を再建した。その後、昌平黌の再建も、水戸「大成殿」を模倣した。翠軒は、文公が幕府(十一代將軍家齊)に「朝鮮通信使」の接待について建言すべきだと論じていた。翠軒によれば、幕府の財政負担を軽減するために、慣例を破り、「朝鮮通信使」の接待を中止するほうがよい。翠軒は、最後、寛政年間(1789-1800)『大日本史』の編纂事業を再興する重用人物となった。⁽⁵⁰⁾ 第七代藩主である徳川治紀(1773-1816)が引き続き、藩政改革を行い、家老体制を打ち破り、儒学者を重用してきた。この時期では、政治運営を補佐する儒学者は、田中江南、立原翠軒、川口長孺、藤田幽谷、青山延手などがある。この時期は、水戸学藩の学問発展の重要時期と言える。筆者は、これを「中期水戸学」と名づけ、「前期」と「後期」水戸学の発展と一貫していると考えている。

(二) 川口長孺と歴史書の編纂

川口長孺 (1773-1835) が水戸藩の藩士で、字が嬰脚、通称が三省、助九郎、号が縁野である。彼は、江戸晩期の歴史学者、医学者で、漢学と詩才によって世間に名が知られる。寛政五年 (1793)、翠軒の推薦で彰考館に入館し、藩主徳川治保の侍講を兼任した。その後、文化十二年 (1815) 彰考館総裁に就任する。川口が翠軒の編纂精神を継承し、『史館事記』、『台湾鄭氏紀事』 (文政十一年、1828年) 三卷、『台湾割拠志』 (文政四年、1822年) 一卷及び『征韓偉略』 (天保二年、1831年) 五卷などの歴史書籍を残した。⁵¹⁾ 次は、川口の編纂した歴史書の内容を略述する。

『史館事記』 (一冊) が、漢文で書き写されたものである。彰考館の修史事業の始末を記録した。修史事業のほかに、藩政、人事などのことについても記録した。銭明の解説によると、『史館事記』の表紙に、「重要書類第十一函分第十三号之一」と記されている。文章には、朱書で句読点をつけ、時々修正したところがある。また、空白な所では、朱書の注釈文が書かれている。巻頭では、彰考館総裁である川口長孺の序文 (文政十一年 (1829) 戊子二月) が次のように記されている。

「旧僚友藤子定嘗著『修史始末』、記國史編纂事、綱舉目張、簡而悉矣。館員稍繼記而至文公末年。文政庚午年、長孺屏居水戸。去年丁亥、蒙榮命再來江戶、猶從事史務、而前後共事者、如翠軒翁、子大、子定輩、皆既凋謝。長孺亦齒豁頭禿、顧影瞻形、嗷嗷自歎、思惟往事、曠如隔世、窃恐館閣事外人不及知者、漸滅而無傳。於此乎、欲記旧事、以自備遺忘、且以貽後人。據史局簿書、去年十一月中旬、起筆于文化三年丙寅。纔記一年、而藩邸會有池魚災、史局簿領、悉為灰塵。此歲春、史務之暇、將再修旧業、而無復年月可據。予所筆記家事簿書、有間及公事者、據此考其年月日、記所暗記、至八年辛未、而去年春徙家也。船漏、沾湿所搬運行李、辛未以後筆記腐敗不存、事雖暗記、月日不詳、故以辛未姑閣筆焉。……此書實將統紹子定之書、而子定之書、全係『國史編纂』來由。予所記傍及館閣事務、故駁雜繁蕪、不如子定書行文簡明云」。巻末には、「文政十一戊子五月納于江戶史館／川口長孺」と記されている。本書が完成されたのは、1828年である。⁵²⁾

『台湾鄭氏紀事』が、上中下の三巻に分けられた。『台湾割拠志』と共に川口によって著されたものである。この本は、慶

長十七年(1612)鄭芝龍が幕府に拜謁した時から、元祿十三年(1700)清帝が鄭成功父子の遺体を南安に送り埋葬する命令を下したまでの約九十年間、鄭氏四世代の事及び朱舜水の事績を記録した。この本は、日本紀元を主とし、中国紀元を添え、資料の出典を明記し、考証などの自注をも付き添えた編年体の史書である。

『征韓偉略』(刊本)、表紙を含めて六十六頁がある。全書は、漢文で書かれ、五巻に分けられた編年体の史書である。著者は、水戸彰考館編修総裁の川口長孺である。韓東育の解説によれば、『征韓偉略』が朝鮮壬辰の戦争を記録した。東アジアの三国がこの七年間の戦争に巻き込まれたので、日本で「文祿慶長の役」と呼ばれ、朝鮮で「壬辰丁酉倭乱」と呼ばれ、明朝で「万曆朝鮮の役」と呼ばれている。第一巻は、戦争の背景、勃発及び1592年五月、日本軍が漢城、開城を攻め落とした事件を記した。第二巻は、1592年五、六月、日本軍が「分朝鮮地界而經略」し、そして1593年二月に起こった碧蹄館戦役の過程を記した。第三巻は、1593年二月、朝鮮將軍権栗の組織した幸州山城防衛戦及び明朝の沈惟敬と日本との外交交渉などを記した。第四巻は、双方の平和交渉、難航や戦争再開から、1597年七、八月、日本軍全羅道に迫るまでの事件を記した。第五巻は、1597年八月、朝鮮全羅道南原の戦況を記し、最後に豊臣秀吉の死後、日本軍の撤退なども記録した。韓東育は、「偉略」という用語は、作者の日本立場を明らかに示していると指摘した。これは、史書編纂にあたる客観的な態度にある程度の影響を与え、また修史過程における価値判断の傾向を決めた。彼が『論贊』を『大日本史』に付ける安積澹泊の作法に反対したことにその傾向をより一層際立たせた。しかし、この著作の成立時期が比較的遅いし、それに加えて彰考館総裁の職を務めていたため、川口は広汎的に日本、中国、朝鮮の各種の著作を収集して閲覧することができる。例えば、日本の『秀吉譜』、『太閤記』、中国の『明史』、『明史稿』、『兩朝平攘錄』及び朝鮮の『西厓文集』、『懲毖錄』(柳成龍)など六十種類以上の資料である。その豊富な史料の利用が川口の公平と言えない修史態度を部分的に矯正できたので、その著作の参考価値が高められた。⁽³³⁾

(二) 立原翠軒と水戸藩の対外の危機意識

水戸藩は『大日本史』を編纂するために、莫大な費用をかけてきた。財政が破綻状況に陥った。光圀が亡くなった後、財政状況はさらに悪化した。寛延二年(1749)、幕府が水戸藩に財政を安定させるための改革計画を提出するよう命じた。当時の水戸藩は、財政という内憂問題だけでなく、対外危機という外患問題を直面していた。天明六年(1786)、第十代将軍徳川家治(1737-1786)が無くなったあと、徳川家斉(1773-1841)が将軍になった。しかし、家斉が権力を独占し、政治は腐敗していた。天明七年(1787)六月から、ロシア船が頻りに南下し、日本に開国通商を迫ってきた。翠軒は、幕府の老中首座の松平定信に当時の三大危機を次のように取り上げた。(1)朝鮮通信使を招聘すること。(2)ロシアの侵入。(3)一向宗の乱。⁽⁵⁴⁾『大日本史』の再編は、この内憂外患の状況を背景に行われた。それと同時に、水戸藩の「攘夷」思想も芽生えた。

安永年間から、ロシア船が蝦夷地に現れた。その上に、1839-1842年のアヘン戦争、「南京条約」の締結、清朝の近代化運動及びイギリスを始めとする欧米列強のアジア侵入など、幕府の警戒心を一層高めた。水戸藩の海防政策から、当時の対応措置の一斑を伺い知ることができる。徳川治保も幕府の閣僚を介して多くの海外の情報を入手した。この時から、翠軒は対外危機の意識を持ち始め、水戸藩には改革を行う必要があると考えていた。そして、荻生徂徠の思想を取り入れてから、日本儒学、神道、国学、蘭学などを折衷して世界を認識すべきだと思うようになったし、改革するには次のような課題探求も迫られた。例えば、当時の世界情勢がいかなるものだろうか、日本がどんな国だろうか、如何にして新しい国家論を構築すべきか、欧米列強がなぜ強いのか、日本がどのように改革すべきかなどの問題である。このような問題意識に基づいて、翠軒は寛政初年、徳川治保を通して幕府の老中の松平定信に上述した「天下三大患」への対策を提出した。寛政四年(1792)、ロシアから大黒屋幸太夫などの漂流民を送還した。その後、幸太夫は江戸に移送され、漂流民問題、シベリアの状況、ロシアの政治や経済などの問題について、十一代将軍の徳川家斉から聞き取りを受けた。後にその内容は『江戸日記』としてまとめられた。幕府がロシアの「和親通商」の要求を拒否したが、翠軒はロシアの情報を把握できた。寛政七年

(1795) 五月、徳川治保が、小石川の藩邸で幸太夫を招待し、ロシアの状況を詳しく尋ねた。水戸藩執政の大場維景や彰考館員の川口長孺が同席傍聴したのち、それぞれ『魯西亜漂流民紀聞』と『光太夫口語』を著した。以降、水戸藩はキリスト教の布教を厳禁し、海防政策を強化していた。第九代将軍の徳川斉昭(1800-1860)の時のなると、「攘夷」政策がさらに強化された。⁽⁵⁵⁾

五、藤田幽谷と立原翠軒の思想相違

前述したように、彰考館総裁を務めてから、翠軒が若手人材を多く育てた。その中で、最も期待されたのは、藤田幽谷(1774-1826)であろう。天明七年(1787)、翠軒の抜擢を得て、幽谷は彰考館に入った。十八歳の時に、老中松平定信の求めに応じて、水戸学発展の基本方針の「正名論」を書いた。その内容は古典文献に近い、「天を父と為し、地を母と為す」という儒教思想を含み、中国哲学の天地人という「三才活用」の特色を持っている。その目的は、天 \parallel 天照大神の偉大、光明、慈愛の性格を明らかにするのである。⁽⁵⁶⁾幽谷は、天皇を擁護し、上級武士らが名分論の秩序関係に基づいて水戸学派の国体尊厳を認め、藩政改革を推進すると訴えていた。文化四年(1807)、幽谷が彰考館総裁になってから、忠臣義士の事績を集めて経済実用の学を追求し、高度な批判精神と外来危機意識を持ち、現状を打ち破り、義公(光圀)の尊王意識を恢復しようとした。幽谷は『大日本史』の編纂に尽力した。結果から見れば、その「志」についての考証が大きな成果を成し遂げた。しかし、翠軒と幽谷の師弟二人は、『大日本史』に「志表」、「論賛」を入れるか否か、そして『史稿』の変名問題などをめぐって激しく論争し、対立していた。

(一) 『大日本史』における三つの改革議題

寛政年間(1789-1800)、立原翠軒を核心とする彰考館員らが、改めて『大日本史』の編纂事業を再開した。彼らは、光圀以降の尊皇史観を継承しながら、「志表」の存否、書名の変更及び「論贊」の存否という三つの改革議題を検討しつづけた。『大日本史』は、司馬遷の『史記』の紀伝体を模倣しているので、「神祇志」、「礼儀志」、「芸文志」などの志があるはずである。しかし、翠軒が編纂事業を引き継いだとき、「志表」の編纂はほぼ進展しなかった⁽⁵⁷⁾。翠軒によれば、光圀の本意は「紀伝」を編纂することにある。「紀伝」の編纂は、寛延二年(1749)に完成されたが、更なる校正と正式刊行の必要がある⁽⁵⁸⁾。ところが、当時の水戸藩は、財政難に陥っていた。それに加えて、志類(例えば、神社、氏族、国郡の制度史、官僚の一覧表)の編纂方針が未だ決められなかったし、収集した資料も不足だった。寛政十一年(1799)、光圀没後百年忌に際して、「大日本史」を朝廷に献上する予定なので、「志表」の編纂を続ければ、『大日本史』の朝廷献上が大幅に遅れる恐れがある⁽⁵⁹⁾。さらに、光圀の時、『神道集成』、『扶桑拾葉集』、『积万葉集』、『礼儀類典』などの志を既に編纂した⁽⁶⁰⁾。時間と費用を省くために、翠軒は「志表」の編纂中止を主張し、水戸藩当局の認可を得た⁽⁶¹⁾。しかし、翠軒の主張は、弟子の藤田幽谷、小宮山楓軒などの多数の館員に反対された。この論争は、予想もよらず水戸藩学派的な対立に発展してしまった。そもそも『大日本史』が南朝正統論を唱える尊皇史書として、北朝の血筋を引き継いだ朝廷に献上されるのは、決して適切とはいえない。しかし、『大日本史』を朝廷に献上するために、寛政七年(1795)三月、翠軒が藤田幽谷や小宮山楓軒など六名の館員を率いて、京都で朝廷代表の裏末光世、国学者の藤井貞幹と協商した。『大日本史』の朝廷献上は結局実現できなかったものの、幽谷にとって紀伝体の『大日本史』と朝廷の関係について考える良い契機となった⁽⁶²⁾。

(二) 『大日本史』における「論贊」存否の論争と題号問題

朱舜水の弟子の安積寛が、享保元年(1716)から享保五年(1720)まで、彰考館編修の三宅観瀾(1674-1718)の意見に

基づいて、『大日本史』の「論贊」（「贊藪」とも呼ばれる）を執筆した。その「論贊」は、天皇個人の道德問題を示すだけではなく、十八世紀前期の治績と法治をも重視し、政治の時代思想の現実主義を帯びている。菊池謙二郎は、「論贊が尊皇思想鼓吹に重大の関係があり、随って外史（頼山陽『日本外史』「引用者」にも影響の深いことが明らかである）」と述べている。戦後日本学界は、皇国史観、尊皇史観をめぐって多面的な論説を呈してきた。松本三之介によれば、「贊藪」は、「名分論的道德の問題だけでなく、同時に「事機」「権変」「勢」といったような客観的諸条件についての洞察や、それへの対応にも帰せられるようになる。このことは、それだけ歴史の動態にういてのリアリスティックな理解が深まったことを物語るのであろう。」⁽⁶⁴⁾玉懸博之によれば、安積寛の「論贊」は、政治人類の一つの領域にとつては、その本来の性格を示し、現実の目識をもっている。⁽⁶⁵⁾大川真によれば、安積寛が、前期水戸学を代表する学者である。その思想個性を内在的に理解すれば、その功績の大きさが分かる。そして、「安積澹泊が思想形成する上で同時代の思想家との交流の意義はまことに大きく、特に日本史論を構成するにあたっては新井白石の存在は看過できない。」⁽⁶⁶⁾安積と新井白石との交流は、朱舜水と幕府儒官の木下順庵との思想交流に遡ることができる。⁽⁶⁷⁾白石が、順庵の愛弟子である。松本純郎の考察によれば、享保六年（1721）から享保十年（1725）白石の死去まで、安積と白石は頻繁に交流していた。⁽⁶⁸⁾その後、翠軒が安積と白石の往来書簡を編修し、『新安手簡』と名づけた。その中で、白石は、『大日本史』では神功皇后を皇后伝に列し、大友皇子を帝紀に列したことについて、安積に質問した。安積は、館員たちがこの問題をめぐって既に深く議論したと答えた上で「自仲哀至壬申功臣」を記述した八篇の文章を作成して、白石の疑問を答えようとした。⁽⁶⁹⁾安積寛と新井白石は、ほぼ同じ時期でそれぞれに「論贊」と『読史余論』（1712-1724）を執筆した。二人とも、公平な歴史記録を目指しながら、政治の現実的側面を重んじている。しかし、安積は南朝正統論を唱えていたが、白石は「正統」について異なる考えを持っていた。そして翠軒と幽谷は、修史事業についての意見が対立している。特に、翠軒は彰考館を閉鎖して、「志」の編纂を中止すべきだと主張したので、幽谷との師弟関係が決裂した。翠軒が光圀の精神を理解して継承し、積極的に修史事業に取り組んだ。しかし、修史精

神に対する把握、史論の執筆は、大きな欠点がある。そして、後輩及び弟子に対する指導も不十分で、文公（徳川治保）は家臣との間の関係を十分に調整できなかった。周りからの反発を受け、やむを得ずに彰考館総裁を辞任した。「論贊」の存否をめぐる、二つの学派の見方が大きく対立した。中国の紀伝体史書の中で『元史』以外に、全て「論贊」が付けられていることから、立原は『大日本史』にも「論贊」を保留すべきだと主張した。しかし、幽谷派から見れば、「論贊」という体例は単なる安積覚が作ったものにすぎず、日本と中国の国体が異なるので、『大日本史』には日本国体の優越性を唱えた方がよい。史実を議論する安積覚の記述は公平といえども、先祖の得失を論じる場合、その是非を論評することは免れ難い。それゆえ、幽谷は「論贊」を削除すべきだと唱えた。このように、「天皇」は批判が許されない崇拜対象のように扱われてきたので、濃厚な政治色彩が帯びていると言えよう。

寛政九年（1797）八月二十九日、藤田幽谷は、「校正局諸学士に与ふ」という書簡に、『大日本史』の題号を『史稿』に改めるべきであると主張した。それが水戸藩に大きな論争を引き起こした。『修史始末』において、幽谷が改名を主張する理由を次のように論じた。(1)国号が日本であって、「大日本」ではない。(2)『大日本史』が私撰史書である。それゆえ、国号を使うのが適切ではない。(3)天照大神の子孫は、天皇として永遠に続くので、「日本」という題名を使えば、外国人からの視角を主とするように見える。(4)光圀は、紀伝、志表の編纂を完成した後で、朝廷に献上して題名を賜ろうとの意向があった。編纂が終わらないまま、光圀は死去した。それゆえ、水戸藩が勝手に『大日本史』を書名にすれば、朝廷を軽視する恐れがある。⁽¹⁹⁾ 翠軒は『大日本史』が全藩の学者の努力成果だと考え、幽谷の意見に賛成できなかった。ほかの館員たちは、幽谷の上述した理由が成立できないとした。たとえばこの史書の題名を『史稿』に改めて成立できれば、光圀の行為が天皇の大権の侵犯を意味する。そして、この史書が漢文で編纂されるので、日本社会だけに向けるわけではない。それゆえ、『大日本史』という題名は、結局、変更されなかった。幽谷が修史事業を主管してから、文化六年（1809）に、神武紀から天武紀に至る『大日本史』二十六巻の刻本を幕府に献上した。そして翌年十二月に、今度幽谷は水戸藩藩主治紀の上表文を奉り、

「論贊」を削除した『大日本史』を朝廷に進献した。文政二年（1819）、紀伝刻本四十五巻が完成され、水戸藩は、二回目にこれを幕府と朝廷に献上した。⁽⁷²⁾

六、近代における水戸学の意義

寛政二年（1790）、幕府老中・松平定信が寛政の改革の一環として、「寛政異学の禁」を行った。幕府の教育機関の昌平坂学問所で朱子学以外の学問の講義を禁止した。しかし、昌平坂以外の場所では、「異学」の講義を禁止するわけではなかった。例えば、昌平坂学問所の儒官である佐藤一斎（1772-1859）は、陽明学の影響を深く受けていた。学問所で朱子学を標榜して講じたが、帰宅してからは、陽明学を講じるようになった。当時の学問所の学者たちは、朱子学と陽明学を比較するのが、常態であった。政治学問が現実への要求に転化してから、徳川社会の学問を朱子学の一元に制限するのは、不可能であった。言い換えれば、「寛政改革」の後、儒学の各派の学問は、既に徳川社会の各階層に浸透していた。水戸学者と徂徠との交流は、宝永六年（1799）徂徠が水戸藩士佐々木宗純の姪との結婚から始まった。享保年間、安積覚と徂徠は、書簡で学問の交流を始めた。享保九年（1724）、徂徠の弟子の岡井仲賜が彰考館の編集になってから、徂徠学が水戸の学者に一定な影響を与えたに間違いはない。明和六年（1769）、水戸藩は道徳軽視を理由として、徂徠学を排斥した。しかし、学問の折衷を求める動向が既に起こった。松平定信が朱子学の大義名分論を唱える『大日本史』を認めながら、徂徠学に寛容な態度を示した。朱子学を教育学として扱い、徂徠学を政治学として扱うのは、一時の潮流となった。小島毅によれば、そもそも徂徠先生が朱子学に楯突いたのは、「朱子学が協調する倫理道徳だけでは世の中は治まらない」という観点からだった。⁽⁷³⁾つまり、倫理道徳だけを唱えている朱子学が時代の要求に応えられないので、荻生徂徠は、新しい学説を主張しはじめた。松平定信は、徂徠学が政治学としての有効性を承認し、政治の分野で徂徠学を利用し、教育の分野で朱子学を用いる政策を

取った。松平定信が徂徠学に対する承認は、会沢正志斎が『新論』（1825）を作成する一つの刺激となった。⁷⁴

会沢正志斎が後期水戸学の代表学者とされている。その著作の『新論』をめぐって複数の解説がある。享和四年（1804）から、『大日本史』の編纂を担当するようになり、文政六年（1823）、幽谷が亡くなったあと、総裁代役に就任した。その後、官界で失脚と復活を繰り返していた。天保十一年（1840）四月、弘道館教授に任じられたものの、天保十五年（1844）の改革が失敗すると、三年間の蟄居を命じられた。嘉永五年（1833）のペリー来航後、改革派の復活と共に、弘道館教授に復帰した。その学問の成績により、將軍・徳川家定に謁見することができた。幕末期、外国の圧迫による危機感の中で、水戸学の発展は政治状況と密接していた。しかし、正志斎は政治家の立場ではなく、儒学者の立場から問題を考えていたので、各派の学問を総括して尊王攘夷思想の学者と見なされるべきである。正志斎は幽谷の学問を継承し、弘化四年（1827）に『下学邇言』を著わした。その内容は、中国漢代儒学者の訓詁、唐代の詞章から陽明学の学説までに及んだ。そして、藤原惺窩と林羅山の儒学を論じたあと、熊沢蕃山の陽明学、貝原益軒、伊藤仁齋、荻生徂徠、新井白石などの学問を論じていた。こういう面から見れば、会沢の学問は折中のな色彩がある。

前期水戸学は、朱子学から誕生した。しかし、「中期水戸学」の立原翠軒から後期水戸学の藤田幽谷「正名論」、会沢正志斎『新論』が、みな日本の「国体」の特殊性と優越性を強調していた。正志斎は、日本と「夷狄」との区別を論じ、儒学の仁政思想と祭政一致の神道世界観を称賛した。翠軒と正志斎は徂徠からの影響を受けていた。後期水戸学には、教育学としての朱子学の要素が減り、政治学としての徂徠学の要素が増えた。水戸学の主要思想は、「尊王敬幕」と言われるが、儒学の名分論を守っているのも、その「敬幕」の側面が体现されるのは難しかった。他方では、天皇は政治権威を象徴する名分を擁したが、実権は持っていない。尊王は、光圀の立場ではあるが、攘夷は、そもそも中国の華夷思想に由来したものである。それは、日本における中華概念の形成と関連して、内憂外患の危機意識を反映していた。「中期水戸学」の立原翠軒より、その外圧に対する危機意識は、「後期水戸学」の藤田幽谷・東湖、会沢正志斎などの名分論を改めて昇華させてきた。

それに加えて、「開国」という衝撃に対する幕府の失策が、最大公約数としての「尊王攘夷」の思想をもたらした。それによって、日本の「天朝」の地位を挽回しようとした。言い換えれば、長い間、日本人を支配する儒教、仏教、神道及び国学思想などの伝統思想のなかで、「幕末思想」はヨーロッパ近代文明思想と衝突したあと、日本の近代化の進展を促進した。水戸学の尊王攘夷思想は、尊王敬幕から、危機を克服するために構築した国家論、近代天皇制に至るまでの歴史によく体现されてきた。それは、同時に日本が西洋近代文明を受け入れる基礎を作ったと思われる。

◎本論文の中国語版が、『日本儒學與思想史研究—王家驊先生紀念專輯』（天津人民出版社、2016年9月、150—172頁）に掲載されている。

【注】

- (1) 藤田東湖「弘道館記」、加藤虎之亮『弘道館記と其の述義』に所収、『日本精神叢書54』（1940年）、5—6頁。
- (2) 吉田俊純『水戸学と明治維新』（東京：吉川弘文館、2003年）、13—14頁。
- (3) 『本朝通鑑』は神功皇后を天皇として扱うことに対して、『大日本史』は、神功皇后を本紀から除いて皇后列伝に列した。
- (4) 671年、天智天皇の死後、大友皇子が即位し「弘文天皇」になった。しかし、彼は、翌672年の壬申の乱で敗れて亡くなった。それゆえ、『日本書記』では、大友天皇の伝記は記されていない。『大日本史』は、名分を重んじるので、大友天皇紀を立てた。
- (5) 後深草天皇は、鎌倉時代中期の第八十九代天皇（在位1246—1260）で、後嵯峨天皇の皇子である。
- (6) 龜山天皇は、鎌倉時代の第九十代日本天皇（在位1269—1274）で、後嵯峨天皇の第七皇子である。大覚寺統の祖である。
- (7) 徐興慶（朱舜水對東亞儒学定位的再詮釋）、鄭吉雄編『東亞視域中的近世儒学文獻與思想』（台北：台大出版中心、2005年）に所収、292頁。
- (8) 清原貞雄『日本国体新論』（東京：育芳社、1937年）、198頁。
- (9) 公武合体とは、幕末において朝廷（公）と幕府（武）を結びつけて幕府権力の再編強化をはかろうとした政策理論、政治運動をいう。それは、幕府と多くの藩からの支持を受け、幕府の権力と地位を強化した。
- (10) 会沢正志斎は、水戸藩士である。水戸藩士。寛政三年（1791）十歳の時、藤田幽谷の私塾の「青藍舎」に入り、後は幽谷の教育内容を

- 『及門遺範』にまとめた。寛政十一年(1799)、書写生として彰考館に入り、『大日本史』の編纂に関わった。正志斎はずっとロシアの南下政策に関心を寄せ、入手できるロシア関係の書物を収集し、享和元年(1801年)に『千島異聞』を著した。天保三年(1832)から、斉昭の行った藩政改革を補佐した。天保九年(1838年)、学校造宮掛に任じられ、藩校の規模・教育内容を研究した。弘道館の教育及び水戸学の発展に貢献をなした。文政七年(1824年)、水戸藩領大津村に食料を求めて上陸したイギリスの捕鯨船員と会見した。その会見の様子を記した『暗夷問答』を著し、翌年に尊王攘夷論について体系的にまとめた『新論』を著して、藩主・徳川斉脩に上呈した。しかし、その内容が過激であるという理由で出版されなかった。
- (11) 藤田東湖は、水戸学者の藤田幽谷の息子である。彰考館編集、総裁などを歴任した。戸田忠太夫と水戸藩の双壁と称された。武田耕雲斎を加え、水戸の三田とも称される。天保十一年(1840年)の斉昭の藩政改革に当たって、大きな役割を果たした。また、後期水戸学及び尊皇攘夷思想の中心人物であった。1853年、ペリー来航の時、斉昭が海防参与として幕政に参画した時に、東湖が輔佐官を務めた。
- (12) 王家驊(儒家的修史觀與日本古代的史学)、《日本研究》1998年第3期。
- (13) 朱舜水「子敬箴」、朱謙之《朱舜水集》(北京：中華書局、1981年)に所収、578頁。
- (14) 冲方丁『光罔傳』(東京：角川書店、2012年)、561頁。
- (15) 山鹿素行『聖教要録』小序、『山鹿素行集』第6卷(東京：国民精神文化研究所、1971年)に所収、167-168頁。
- (16) 同上、167頁。
- (17) 徐興慶(朱舜水與安東省菴之思想異同)、《獨立禪師與朱舜水：文化傳播者的不同論述》を参照。徐興慶《朱舜水與東亞文化傳播的世界》(台北：台大出版中心、2008年)に所収。
- (18) 山鹿素行『聖教要録』上卷「道統」、『山鹿素行集』第6卷(東京：国民精神文化研究所、1971年)に所収、178頁。
- (19) 山鹿素行『聖教要録』小序、『山鹿素行集』第6卷(東京：国民精神文化研究所、1971年)に所収、177頁。
- (20) 岩橋遵成「朱舜水の学風とその影響」、『徂徠研究』(東京：関書院、1934年)、40頁。
- (21) この点については、次の文献を参照できる。藤澤誠「朱舜水の古学思想と我が古学派との関係」、『東京支那学報』第12号、1969年、潘朝陽(古学取向的朱舜水)、《家園深情與空間離散：儒家的身心體證》(台北：台灣師範大學出版中心、2013年)、243-298頁、徐興慶(東アジアの視野から見た朱舜水研究)、『日本漢学研究』2(東京：二松学舎大学、2007年)、357-396頁。
- (22) 朱舜水「答加藤明有問」、朱謙之《朱舜水集》(北京：中華書局、1981年)、382頁。
- (23) 安積覺「答加荻徂徠書」、朱謙之《朱舜水集》(北京：中華書局、1981年)、768頁。
- (24) 同上。
- (25) 同上。
- (26) 木下順庵と朱舜水との往来書簡が『錦里文集』に保存されている。徐興慶《新訂朱舜水集補遺》(台北：台大出版中心、2004年)を参照。朱舜水と日本古学派の関係については、徐興慶(朱舜水思想與加賀藩儒教發展再考)、《朱舜水與近世日本儒学的發展》(台北：台大

- 出版中心、2012年）、〈朱舜水思想の日本文化に対する影響―孔子の形象の伝播を中心に〉、『台大日本語文研究』第26期（台北：台湾大学日本語文学系、2013年12月）、183―215頁を参照できる。
- (27) 田原嗣郎「素行学・仁齋学・徂徠学」、『徳川思想史研究』（東京：未來社、1967年）、491―517頁。
- (28) 徳川真木監修、徐興慶主編『日本徳川博物館藏品品録Ⅱ―徳川光国文献釋解』（上海：上海古籍出版社、2014年）序章。
- (29) 朱舜水〈與安東守約書〉、朱謙之『朱舜水集』（北京：中華書局、1981年）に所収。
- (30) 高悦〈朱舜水對荻生徂徠思想影響之再思考〉、『外国問題研究』2016年1期（第219期）、東北師範大学、2016年3月。39―42頁。
- (31) 岩橋遵成『徂徠研究』（東京：一誠社、1934年）、44頁。
- (32) 尾藤正英「水戸学の特質」、『水戸学』日本思想大系、564頁。
- (33) 小島康敬『徂徠学と反徂徠』増補版（東京：べりかん社、1994年）、178頁。
- (34) 名越時正〈前期水戸学の国体論〉、『水戸史学』（1974年）、『水戸光圀とその余光』（水戸：水戸史学会、1985年）、111頁。また、名越時正「現代の徂徠学派―新水戸学論に警告する」、『水戸学』第11号（1974年3月）、「現代の徂徠学派―新しい水戸学論を批判する」、『日本』第7号（1974年7月）などの文章も、その関連性を否定した。
- (35) 荒川久寿男『水戸学の現代的意義』（東京：錦正社、1987年）。
- (36) 荒川久寿男「近世正学の指標藤田幽谷」、『水戸学の現代的意義』（東京：錦正社、1987年）に所収。
- (37) 橋川文三「水戸学の源流と成立」、『橋川文三著作集』10（東京：筑摩書房、2001年）、増補版に所収、324頁。
- (38) 梶山孝夫「水戸学と徂徠学―尾藤正英の所論に寄せて」、『現代水戸学論批判』（東京：錦正社、2007年）、26頁。
- (39) 高山大毅「遅れてきた「古学」者―会澤正志齋の国制論」、『近世日本の「礼楽」と「修辞」―荻生徂徠以後の「接人」の制度構想』（東京：東大出版会、2016）、148―149頁。
- (40) 青山延子『文苑遺談』、『日本儒林叢書』第三冊（東京：東洋図書刊行会、1928）、82頁。
- (41) 長久保赤水は、若い頃彰考館総裁を務めた名越南溪に師事し、朱子学・漢文・天文地理などの研鑽を積んだ。その後、水戸藩主徳川治保の侍講となり、藩政改革の建白書を提出したことがある。1774年、『日本輿地路程全図』を作成。1779年、大坂で『改正日本輿地路程全図』を刊行。1785年、『改正地球万国全図』、『大清広輿図』を次々と刊行。1786年、『大日本史』の地理志の編集に従事した。
- (42) 谷田部東壑は、水戸藩士で、医師、儒者である。一時、彰考館館員と成った。『東壑筆記』を著した。
- (43) 立原翠軒は、江戸時代中期から後期の水戸藩士である。本姓は平氏。字は伯時、東里。号は翠軒。水戸藩第五代藩主・宗翰及び第六代藩主・治保を輔佐した。父は水戸藩彰考館管庫・立原蘭溪（甚蔵）。嫡男は水戸藩士で南画家の立原杏所、孫には幕末の志士・立原朴次郎や閨秀画家の立原春沙がいる。
- (44) 吉田俊純『水戸学と明治維新』（東京：吉川弘文館、2003年）、17頁。
- (45) 『西山遺聞』は、立原翠軒が記録した光圀の言動と逸話集である。非常に貴重な資料である。

- (46) 『此君堂文集』については、徳川真木監修、徐興慶主編《日本徳川博物館藏品録Ⅱ―徳川光国文献釋解》(上海・上海古籍出版社、2014年)、206―207頁を参照。
- (47) 『往復書案』とは、『大日本史』編纂の史料収集のために各地に派遣された史館員と江戸の史館員との間の往復書簡である。これらの書簡は、そもそも「御用書」、「御用書案」、「御用状」、「御用状留」などと呼ばれていた。寛政年間初め頃、当時の彰考館総裁立原翠軒が史館記録として整理した。
- (48) 『垂統大記』は、彰考館辞職後の立原翠軒が、弟子の小宮山楓軒とともに、藩主治紀に命じられて編纂した紀伝体史書である。主要内容が、徳川家創業守成二代主従の事跡である。翠軒歿後、楓軒が天保十年(1839)に完成した。『垂統大記』という書名は、徳川斉昭が天保八年(1835)に定められた書名である。「垂統」の出典は、『孟子』の「君子業創垂統、為可繼也」(梁惠王章句下)である。ここでの「君子」は、東照宮徳川家康を指し、敬慕を含蓄している。
- (49) 秋山高志「彰考館総裁立原翠軒の資料保存」、『水戸の文人―近世日本の学府』(東京・ぺりかん社、2009年)、414―441頁。
- (50) 当時の彰考館総裁は、富田長洲、鈴木白泉、立原翠軒の三人であった。翠軒が特命『大日本史』編集に任じられた。
- (51) 川口長孺『征韓偉略』、高須芳次郎編『立原翠軒・豊田天公集』に所収。水戸学大系第4巻(東京・井田書店、1942年)、212―290頁。
- (52) 徳川真木監修、徐興慶主編《日本徳川博物館藏品録Ⅲ、水戸藩内外関係文献釋解》(上海・上海古籍出版社、2015年) 錢明解説、26―28頁。
- (53) 同上、韓東育の解説を参照、166―172頁。
- (54) 松平定信は、水戸藩第六代藩主の徳川治保の推薦により、老中となった。実は水戸藩では、松平定信を徳川治保に極力推薦したのは、立原翠軒であった。
- (55) 徳川斉昭は、幼少より会沢正志斎に水戸学を学び、その聡明才智を示した。文政十二年(1829)に藩主となってから、積極的に弘道館を作り、海防を強化し、水戸藩の改革を推進した。西洋からの圧力に対して、高い危機意識をもって攘夷論を唱えていた。斉昭の朱筆入り文書から、その思想の様態が窺われる。徳川真木監修、徐興慶主編《日本徳川博物館藏品Ⅲ―水戸藩内外関係文献釋解》(上海・上海古籍出版社、2015年)を参照。
- (56) 高須芳次郎編『藤田幽谷集』、水戸学大系第3巻解題、(東京・井田書店、1942年)、9頁。
- (57) 吉田一徳『大日本史紀傳志表撰考』(1965)を参照。
- (58) 光圀歿後十五年(1715)に完成した『大日本史』(本紀73巻、列伝170巻)は光圀廟に供えられた。享保五年(1720)、安積寛の「論贊」を付けた『大日本史』が、幕府に献上された。
- (59) 寛政十一年(1799)の光圀百年忌に際して、立原翠軒は、『大日本史』の紀伝浄写本80巻を、光圀廟に献じた。
- (60) 徳川真木監修、徐興慶主編《日本徳川博物館藏品録Ⅱ―徳川光国文献釋解》(上海・上海古籍出版社、2014年)。
- (61) 立原翠軒によれば、『史記』の130巻には、志が8巻しか設けられなかったもので、『大日本史』で15巻の志を編纂すれば結構である。しか

し、志を紀伝と共に完成するのは難しいと考えていた。

- (62) 吉田俊純『水戸学と明治維新』（東京：吉川弘文館、2003年）、26頁。
- (63) 菊池謙二郎『水戸学論叢』（東京：誠文堂新光社、1943年）、414頁。
- (64) 松本三之介『近世日本の思想像歴史的思考』（東京：研文出版、1984年）、23頁。
- (65) 玉懸博之「前期水戸学の歴史思想統考―安積澹泊の「論贊」をめぐって」、『東北大学日本文化研究所所報』19、1983年。後に、『近世日本の歴史思想』（東京：ぺりかん社、2007年）に収録される。
- (66) 大川真「安積澹泊『大日本贊藪』について」、徐興慶、辻本雅史（編）『季刊日本思想史』81（東京：ぺりかん社、2014年）に所収、49頁。
- (67) 徐興慶「加賀藩における朱舜水の思想の普及」『東アジアにおける文化情報の発信と受容』（東京：雄松堂、2010年）、439―457頁。
- (68) 松本純郎『水戸学の源流』（東京：朝倉書店、1945年）、266頁。
- (69) 前掲、大川真論文。
- (70) この点に対して、幽谷の弟子の会沢正志斎は、『迪彝篇』において、古代より「大日本」という題名を使って多くの著作が作られたと反発した。
- (71) 吉田俊純『寛政期水戸学の研究―翠軒から幽谷へ』（東京：吉川弘文館、2011年）、119―120頁。
- (72) 井坂清信「文政期における水戸藩修史事業の一斑―当館所蔵『藤田幽谷書簡』の翻刻を終えて」、『参考書誌研究』第36号、1989年8月。
- (73) 小島毅『増補靖国史観―日本思想史を読みなおす』（東京：筑摩書房、2014年）、34頁。
- (74) 同上注。

【キーワード】・「中期水戸学」・立原翠軒・藤田幽谷・水戸学・徂徠学